

国際子ども図書館
の
窓

子どもの本は
世界をつなぎ、
未来を拓く!

第2号
2002.3

表紙デザイン：熊谷 博人氏

《国際子ども図書館 全館オープンへ》



明治期改修部分の外壁工事を終え、正面前庭の整備が進む



裏庭の工事風景



裏側から見た建物



1階 子どものへや



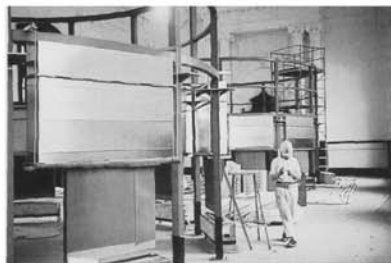
大階段



2階 第二資料室



書庫



3階 本のミュージアム







3階 ラウンジ

<改修中の館内各階の様子>



<目次>

口絵 国際子ども図書館全館オープンへ

はじめに	= 富田美樹子	2
国際子ども図書館のシンボルマークが決定!		3
全面開館に向けて		4
①施設案内		
②これからのサービス	I 資料情報センター機能 II 国内の連携・協力 III 国際的な連携・協力 IV 来館した子どもへのサービス	
 プランゲ文庫児童書展に向けて		9
世界の児童書—蔵書紹介 アンデルセン『新・お話と物語』ほか3冊—池田宣政 (南洋一郎) コレクションから—	= 杉山きく子	10
国際子ども図書館の見学		14
 国際子ども図書館建物の話		18
国際子ども図書館ミュージアムの展開	= 服部比呂美	19
「絵本ギャラリー」への招待 絵本ギャラリー「絵本は舞台」アンケート調査結果		25
 投槍像裏話		30
アジア地域との連携へ向けて—アジア児童図書館員会議2001から—	= 佐藤尚子	31
活動報告		33
 上野図書館の戦前と戦後		40
数字で見る! 国際子ども図書館		41
これから…		46
利用案内		47

はじめに



『国際子ども図書館の窓』第2号をお届けいたします。

本誌は、国際子ども図書館が部分開館した2000年度に創刊されました。『窓』を通して、国際子ども図書館の中を見通し、外界からの新鮮な風や光を取り入れるためです。当館の紀要として、子どもの本や読書に関する出会いと交流の場、情報交換の場となることを目指しております。

本年5月5日こどもの日に、国際子ども図書館はいよいよ全面開館を迎えます。現在一時休館させていただき、本館からの資料の移転をはじめとする様々の開館準備に、職員一丸となって取り組んでおります。開館2年目にあたる本年度は、子どもの部屋や資料室でのサービス、展示会などを展開しつつ、児童書の情報センター機能の構築、学校図書館へのサービスの組み立て、来年度以降の展示会の企画等々、全面開館後の業務計画の策定を進めてまいりました。

本号では、全面開館後の施設とサービスをご案内するとともに、全面開館後につながる活動内容をご報告いたします。当館は国立で初めての児童書の専門図書館であること、広範な方々のご要望と期待、ご支援を頂いて誕生した図書館であることなどから、開館以来様々なメディアでご紹介頂くと同時に多数の見学者を迎えてまいりました。特に子ども達の見学については、日本全国の子どもたちに当館を訪れて頂く一つのかたちとして、今後とも積極的に推進していきたいと考えております。展示と電子図書館については、それぞれ、国際子ども図書館の業務を構築する重要な柱として位置付けてまいりました。ここでは、本年度の業務を踏まえて今後の展開・展望をご報告いたします。

当館は、児童書の情報発信基地としての重要な役割が期待されております。情報センター機能を果たすためには、所蔵資料の書誌作成とインターネットによる発信が重要ですが、そのためには、何よりも資料の網羅的な収集が必要です。当館は納本制度により、国内刊行の児童書を網羅的に収集しますが、貴重な資料を過去に遡って収集することもまた重要です。これには購入による他、コレクションとして寄贈をいただく場合もあります。本号では、今年度寄贈いただいた池田宣政(南洋一郎)コレクションのうちから、アンデルセンの古書についてご紹介いたします。

全面開館後は、研修会や講演会なども始めることとなっており、館外の方々から本誌に寄稿して頂くことも想定しております。この『国際子ども図書館の窓』が、情報交流の場として大きく育っていくことが出来ますよう、皆様のお力添えをお願いいたします。

2002年2月

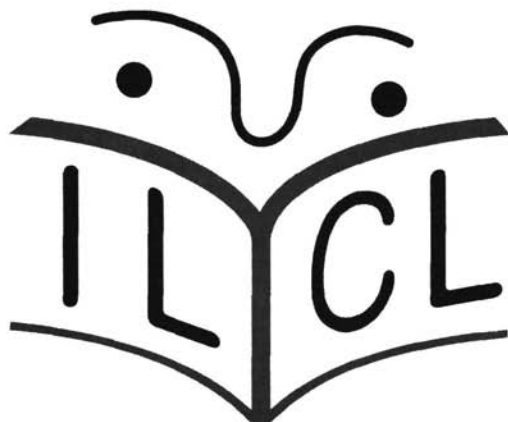
国立国会図書館国際子ども図書館長 富田美樹子

～ 国際子ども図書館のシンボルマークが決定！ ～

平成14年1月1日より国際子ども図書館のシンボルマークが登場しました。

このシンボルマークは、平成14年5月5日に全面開館する当館をさらに多くの方に知っていただき、利用していただくため、国際子ども図書館の象徴として制作しました。

今後は国際子ども図書館内をはじめ、当館の行うイベントなどさまざまな場面で活躍していきます。



I L C L = International Library of Children's Literature
(国際子ども図書館の英語名略称)

おだやかな表情で子どもが本を読んでいるこのデザインは、だれにでも簡単に描いていただけるように、また多くの方に親しんでいただけるようにとの願いを込め制作しました。

全面開館に向けて

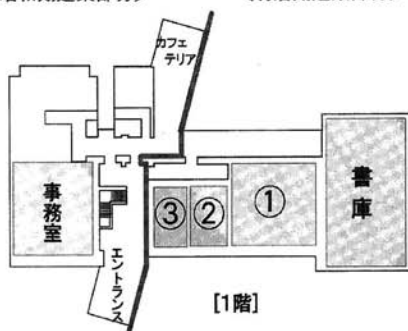
2000年5月5日に昭和期建築部分を改修して開館した、国際子ども図書館。それからはや2年がたち、明治期建築部分の改修工事も完了し、いよいよ全面開館の日を迎えようとしています。今までの3倍の広さになった国際子ども図書館の全面開館後のサービスをご紹介します。

①施設案内

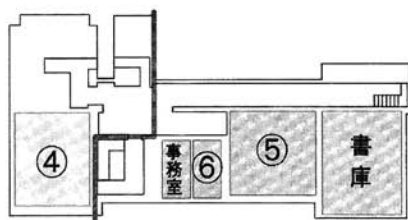
〈各部屋の概要〉

〈昭和期建築部分〉

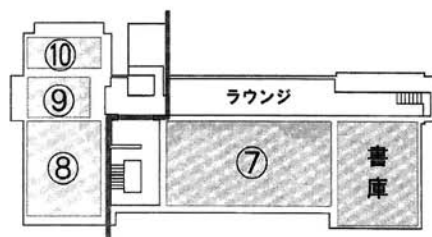
〈明治期建築部分〉



【1階】



【2階】



【3階】

< 1階 >

- ①子どものへや：国内外の子どもの本を配架
- ②世界を知るへや：世界各国を紹介する資料や絵本を配架
- ③おはなしのへや：定期的におはなし会などの催しものを実施

< 2階 >

- ④第一資料室：(収蔵冊数約5万冊) 和書・アジア資料等
- ⑤第二資料室：(収蔵冊数約2万5千冊) 洋書・電子資料等
- ⑥研修室：研修プログラム等を実施

< 3階 >

- ⑦本のミュージアム：年数回の企画展示を開催
- ⑧ホール：講演会やシンポジウム、イベント等を開催
- ⑨メディアふれあいコーナー：子どもたちが「絵本ギャラリー」をはじめとする、さまざまなメディアとふれあえるコーナー

< 4階 >

- ⑩ワークルーム：子どもの本に関するワークショップなどのプログラムを実施

< 書庫 >

6層構造、収蔵能力約40万冊

②これからのサービス

I 資料情報センター機能

1. 蔵書

下記の表は、全面開館時における国際子ども図書館の蔵書数を、部分開館直前の平成12年4月時と比較したものです。千代田区永田町にある国立国会図書館に残置されていた資料もほとんど移管されて、蔵書数は大幅に増加することになります。これら従来の収集対象資料のほか、新たに平成14年4月から収集が開始される学校教科書も平成15年度に提供を開始する予定です。

資料種別		全面開館時(概数)	2000年4月(概数)
和図書	児童図書	140,000冊	16,000冊
	小・中学生用学習参考書 (1969年以降受入)	7,500冊	0冊
	児童書関連資料	9,000冊	3,500冊
洋図書	児童図書(含 特別コレクション)	29,000冊	26,000冊
	児童書関連資料	1,200冊	1,000冊
逐次刊行物	国内児童雑誌	1,354誌	574誌
	外国児童雑誌	60誌	42誌
	新聞	17紙	17紙
非図書資料	児童用紙芝居、 カード式資料、カルタ	500点	—
	電子資料(CD-ROM)	8点	—
	マイクロフィッシュ	23,915枚	20,824枚
児童サービス用資料		7,000冊	3,200冊
合計	図書	193,700冊	49,700冊
	逐次刊行物	1,431タイトル	633タイトル
	非図書資料	24,423点	20,824点

2. 電子図書館

国際子ども図書館児童書総合目録は、児童書の分類・件名データ等の情報を付加し、整備を図ります。

また、当館新着資料の書誌情報のホームページでの提供、「海外で翻訳出版された日本の子どもの本」書誌作成とホームページでの提供及び当該資料の収集に努めます。現在の大人向けホームページのほかに新たに子ども向けホームページを開設する予定です。現在の「絵本は舞台」のほか、新規に「コドモノクニ」を絵本ギャラリーに加え、プログラムの一部はホームページでも提供します。

II 国内の連携・協力

1. 学校図書館

全国の学校図書館を対象とした図書館サービスを始めます。これらのサービス内容を紹介する『学校図書館協力ハンドブック』（仮称）を刊行する予定です。

<セット貸出>

一定のテーマに即した50冊程度の資料からなる「貸出セット」を構築し、平成14年度中には貸出を開始する予定です。「貸出セット」のテーマとして、「国際理解」を想定しています。特定の国・地域に関する資料として、日本語の児童書（歴史、地理、文化、昔話等）、写真集（一般書を含む）およびその国の絵本などを中心に構成します。また、教師や司書の説明に役立てられるような便覧、案内、地図等の資料も加えます。対象学年に応じた資料の入替えも行います。

<複写・レファレンス>

現在、公共図書館等へ行っているサービス同様、学校図書館に対しても次のサービスを開始します。

- ・ 郵送複写（ファクシミリによる申込みを含む）サービス。
- ・ 文書レファレンス…国際子ども図書館所蔵児童書・児童文学関係・児童図書館・学校図書館活動等について。

2. 連絡会議の設置

国内の諸機関との連絡を密接にし、効果的なサービスの提供を図ることを目的として次のような会議等を開催していく予定です。

<国際子ども図書館の事業に連携・協力する関連機関>

国際子ども図書館の事業計画を説明し、相互情報交換、交流を行います。

<公共図書館・学校図書館関係者>

図書館サービスの役割分担について話し合い、国際子ども図書館の利用方法などのガイダンス等を行います。

3. 研修の実施

公共図書館の児童サービス担当者および学校図書館関係者等を対象とした研修を関係機関と協力して実施し、将来は研究員または研修生の受け入れをする予定です。

4. 講演会、シンポジウムの実施

児童文学作家、児童図書館関係者等を講師に招いての講演会、シンポジウムおよび交流会を実施します。場合によっては研修プログラムに組み込むこともあります。

Ⅲ 国際的な連携・協力

1. 外国類縁機関との交流

外国の児童図書館等との情報交換を進めるほか、児童図書館関係者の招へい事業、研修生の受け入れ等を行っていく予定です。

2. 国際シンポジウムの開催

海外の児童図書館関係者、児童文学者等を招いての国際シンポジウムを開催します。



(写真)

平成12年5月8日に開催された、国際子ども図書館開館記念国際シンポジウム「子どもと本と読書-21世紀の子どもたちのために今何をなすべきか-」

3. アジア地域に対する協力・連携

アジアで発行される児童書に留意し、積極的な収集をはかるとともに、アジア地域の出版・児童文化状況に関する調査を実施していく予定です。

関連機関と協力して、アジア地域の図書館・読書活動の支援をしていきます。

4. ホームページでの他言語情報発信

国際的な情報発信をめざして英文ホームページを開設し、英文検索画面の早期導入を図ります。また、現在提供している児童書の多言語提供システム「世界の子ども世界のことば」を、ユネスコアジア文化センター等関連機関と協力して拡充し、インターネットを通じて世界の子どもたちに提供します。

IV 来館した子どもへのサービス

1. 「子どものへや」等の開室

子どもの閲覧スペースは、これまでの4階「子どもの部屋」から1階へ移り、「子どものへや」「世界を知るへや」「おはなしのへや」が開室します。

<子どものへや>

国内外の子どもの本・絵本・昔話・読み物・知識の本・雑誌などを配架します。カウンターでは、子どもたちからの質問などにも対応します。

また、テーマに応じた小展示などを行います。

<世界を知るへや>

国際子ども図書館の「国際」という観点から、子どもたちが世界に興味や関心を持ち、国際理解を深めることを目指しています。世界各国や地域の地理、歴史、民俗等に関する資料や、海外の絵本などを配架します。

<おはなしのへや>

おはなし会や、絵本の読み聞かせを定期的に行います。

2. 子ども向けイベントの開催

夏休みなどには、1階「おはなしのへや」や、3階ホールで、科学あそびや音楽会などのイベントを実施します。

3. メディアふれあいコーナーの開設

全面開館後の3階ホールの一角に、子どもたちがさまざまなメディアとふれあえるコーナーを設置し、納本資料とは別に収集したパッケージ系電子出版物（CD-ROM、DVD等）や、当館が作成した電子コンテンツ「絵本ギャラリー」をパソコン及び大型スクリーン等を通して提供します。

4. 本のミュージアム

子どもの本に関する企画展示会を年数回実施する予定です。

全面開館記念展示会として、「不思議の国の仲間たちー昔話から物語へ」展を2002年5月5日から9月14日まで開催します。

ブランゲ文庫児童書展に向けて

今から約半世紀前、約8,000タイトルの日本の児童書がアメリカへ渡りました。戦後まもない1945年10月から49年10月までに日本で出版され、日本を占領した連合軍最高司令官による検閲のために日本の出版者から提出されていた児童書です。これらの児童書をアメリカに持ち帰ったのは、当時検閲を担当していた連合軍最高司令官参謀第Ⅱ部の歴史部長であったメリーランド大学歴史学教授ゴードンW.ブランゲ博士。博士は、連合軍最高司令官が検閲のために収集、管理していた出版物や文書類を母国に持ち帰り母校のメリーランド大学図書館へ寄贈しました。この資料群はブランゲ文庫と名付けられメリーランド大学図書館に収蔵されています。特に児童書は、整理と目録作業に多大な役割を果たした村上寿世女史の功績をたたえブランゲ文庫「村上コレクション」と命名されています。

ところで、2000年5月に、「村上コレクション」を中心とした資料の展示会が早稲田大学で開催され、国内で好評を博しています。その展示会を来年1月から国際子ども図書館で開催することになりました。昨年12月に展示会小班をたちあげ、「国際子ども図書館らしい展示会にしよう」とメンバーは気合十分。「国際子ども図書館ならではの視点とは如何？」と検討を重ねています。そしてもう一つ、ブランゲ文庫「村上コレクション」と国立国会図書館所蔵児童書の重複調査という作業が進行しています。今後、重複調査の対象を児童書総合目録参加館まで拡大する予定です。この調査結果は展示会の時に、みなさんにお知らせすることになります。重複調査は、ブランゲ文庫「村上コレクション」の目録データを1データ毎、児童書総合目録に入力し、当館の所蔵の有無を確認するという気の遠くなるような地道な作業です。当館に所蔵していない児童書や著者の手許にもない児童書もあり、日本国内には既に存在していないのかもしれない日本の児童書が、遠く離れたアメリカで存在しているということを目の当たりにし《奇跡》を感じずにはいられません。敗戦国の出版物を廃棄せず母国に持ち帰ったブランゲ博士、その後の整理、目録作業及び保存作業に携わってきた方々、また、現在携わっている方々に敬意をはらいつつ、重複調査は日々続いております。

(山崎 美和)

アンデルセン『新・お話と物語』ほか3冊
—池田宣政（南洋一郎）コレクションから—

杉山きく子

1. はじめに

2001年、国際子ども図書館は、池田宣政（南洋一郎）氏のご遺族、池田孝二氏、池田陽子氏より、同氏の著作を中心に870冊の寄贈を受け、「池田宣政（南洋一郎）コレクション」として当館で公開することになった。寄贈資料の一部にアンデルセンの古書4冊が含まれているので、これに関する来歴を簡単に紹介する。

寄贈を受けた本は下記の4冊である。

『新・お話と物語』（1870—74）1～3巻

“Nye eventyr og historier.”

Med illustrationer efter originaltegninger af Lorenz Frølich.

Kjøbenhavn, C. A. Reitzel, 1870—74.

3 v. illus. 17 cm.

Forste Bind(1870) : [4], 344 p.

Andet Bind(1871) : [4], 336 p.

Tredie Bind(1874) : [4], 340 p.

【知られたる、また忘れられし詩】(1867)

“Kjendte og glemte digte (1823—1867) af H. C. Andersen.”

Kjøbenhavn, C. A. Reitzel, 1867.

xiv, 378 p. 15 cm.



2. 『新・お話と物語』

アンデルセン（Hans Christian Andersen 1805—1875）は、1835年に最初の童話集『子どものための童話集 第1集』を刊行する。これは60ページ程の小冊子で4つの物語が収められていた。それ以降、アンデルセンは毎年のように小冊子の童話集を出し続け、何年かごとにそれらをまとめ、新たなタイトルを付けて出版する形式を取っている。これらの童話集は、当初は不評であったが、しだいに広く支持されるようになり、晩年までに描きつづけた童話は160編を越えている。100カ国以上に翻訳され、今もなお全世界で愛読される「童話の王様」となった。

今回寄贈を受けた『新・お話と物語』（Nye eventyr og historier）1～3巻には、ローレンツ・フローリク（Lorenz Frølich 1820—1908）の挿絵がついている。

フローリクは、コペンハーゲン生まれの画家、図案家で、ドイツ、イタリア、パリ、ロンドンに滞在し、ヨーロッパ各地で美術の仕事に携わった。1845年の『ゲーア誌』の中で『にわとこおばさん』の挿絵をエッチングで発表したのが、これがアンデルセン童話の印刷された挿絵の第一号であった。

ドイツで初めて挿絵入りアンデルセン童話集の企画が持ち上がったとき、アンデルセンはフローリクを思い浮かべたが、フローリクは当時パリにいたため、出版社に紹介された海軍中尉のペーダセン (Vilhelm Pedersen 1820-1859) の挿絵により、1849年にドイツで、翌50年にはデンマークで挿絵入りの童話集が出版される。これは、大好評でアンデルセンの名を不動のものにした。しかし1859年、ペーダセンが他界し、その後の仕事を引き受けてくれる画家が、すぐに必要になり、アンデルセンはかつて挿絵を描いたことのあるフローリクに仕事を依頼する。これ以降、フローリクは、アンデルセン童話の挿絵を一手に引き受けることになる。

フローリクは、環境と才能に恵まれ、若い頃から絵画の勉強を始めた。美術に対する確かな目と、鋭い感覚を持ち、鍛錬した技術により、既に画家として高く評価されていた。しかしアンデルセンは、ペーダセンのような庶民的な親しみやすさと安らぎを求め、フローリクの幻想的な挿絵になじめず、両者はしばしば衝突したようである。しかしフローリクは、アンデルセンの最後の童話集まで描きつづける。

フローリクは公的に挿絵を引き受ける以前に、すでにアンデルセンの作品に絵を描いている。1837年、当時17歳だったフローリクは、出版されたばかりの『子どものための童話集 第3集』に収められた『人魚姫』の挿絵を鉛筆とペンで描いた。これは当時未発表に終わったが、年若いフローリクが、自らアンデルセンの作品に挿絵を描いたことは、後年の仕事を暗示するようで興味深い。

日本では岩波書店の『完訳アンデルセン童話集』の4巻から7巻が『新・お話と物語』の翻訳に当たる。岩波版の1巻から3巻は、デンマークで1862年、63年に出版された『お話と物語』(Eventyr og historier) が該当し、これにはペーダセンの挿絵が付いている。

3. 旧所蔵者と装丁者について

1924年夏、池田宣政は、『新・お話と物語』ほか3冊のアンデルセンの本を Holger Laage-Petersen (1885-1949) から寄贈される。Laage-Petersen は、コペンハーゲン生まれの大商人、商業会議所会頭であり、アンデルセンのコレクターでもある。Laage-Petersen が収集したコレクションは、1953年にデンマーク王立図書館に寄贈され、貴重書として扱われている。アンデルセンの原稿と手紙を含む4,500点の資料があり、他に比類のないコレクションである。そのうち1,000点が当時有名な装丁家だった Anker Kyster (1864-1939) の手により装丁されている。

池田コレクションの4冊も、当初仮綴で出版されたものが Kyster により製本され、旧蔵者の蔵書票が貼付されている。仮綴されていたときの黄色い表紙が第3

巻の最後に挿みこまれている。また見返し左上には、“Anker Kyster”の文字が刻印されている。『知られたる、また忘れられし詩』は、アンデルセンの生前に刊行された最後の詩集で、詩218編を収めている。本書は製本の際に、サイズが1cmほどカットされている。また第1丁の1葉(xv-xvi)が失われている可能性がある。

装丁家 Anker Kyster は、本に対する芸術的で繊細な感覚と職人として優れた腕前を持っていた。コペンハーゲンに工場を持ち、後継者を育て、また理論家としても、装丁芸術について数多くの優れた論文や著作を著している。

4. 池田宣政と少女エバについて

池田宣政は1924年8月に、デンマークのコペンハーゲンで開かれたボーイスカウト世界大会(ジャンボリー)に少年団日本聯盟派遣員として参加した。大会終了後、各国のスカウトは市民の家庭に招待されて、1週間を過ごした。宣政は海運業者を営むスワンソン宅に招待される。日本人スカウトの招待を希望したのは、娘のエバである。このときの出会いをその後、宣政はスワンソン氏の暖かいもてなしと少女エバの友情に深い感謝を込めて描いている(『四十年目の手紙』)。



<1924年当時>

エバは市の商業会議所に務めていたが、勤務後に宣政と待ち合わせて「人魚の像」や「アンデルセンの像」、チボリ公園等を案内してくれた。二人はいつしか互いに「Curio」「Silly」と呼び合う兄妹のような仲になる。これは初めて出会ったときに、日本人は珍しいから招待したと言ったエバの言葉を受けて、宣政が自身を curio(珍品)と称したこと、ちょっとでもエバが失敗すると silly girl とからかったことから、互いの愛称となったのである。宣政が持ち帰ったデンマーク博物館のパンフレットにはエバの別れの文が記されているが、そこにも再会を願うとともに“curio”と“silly girl”の言葉が残されている。

“To the very clever Japanese boy scout to help him to be still more clever, if possible, so that he may read the language of a very silly girl, who would be very glad to see him again in her home and who has been very very fond of her curio. Mange Tak.”

滞在中に、エバは宣政を知人である商工会議所会頭の Laage-Petersen 宅に伴い、一夜歓談する。遠来の客を歓待した Laage-Petersen は、『新・お話と物語』1巻の見開きに自筆で、献示の言葉を記した上、この若い日本青年に自身のアンデルセン・コレクションから4冊を贈っている。

帰国後も二人の間に文通が続くが、大戦をはさんでいつしか交流は途絶えた。70歳を迎えて、再び昔を思い出した宣政はデンマークの新聞に当時の思い出を投書し、

それを読んだエバから航空便が40年ぶりに届く。宣政は自著を送り、若い頃受けた歓待でエバを迎えたいと日本に招待するが、実現はしなかった。エバは宣政の著書を居間に飾っていたという。

この訪欧は宣政にとって、作家への転機となる。世界大会でデンマークの少年が、桜の国である日本人の宣政にサクランボを贈ってくれた。この話を当時小学校の教壇で、受け持ちの子どもたちに話すとみな感動した。力を得た宣政はもっと多くの子どもたちに聞いてもらいたいと、原稿を『少年倶楽部』に送り、処女作『懐かしき丁抹の少年』（『少年倶楽部』1926年9月号）が生まれた。またドイツでの印象深い体験が代表作『形見の万年筆』となって結実した。手元に間違っていて残ってしまった万年筆を何とか日本人の Ikeda に返そうと誠意を尽くすドイツ少年の話は、戦後も各社の道徳の教科書に掲載され、英語やドイツ語、中国語にも翻訳されている。

その後宣政は、感動実話物語作家として不動の地位を築いていくと同時に、一方では野生的な少年を育てたいという願いから冒険小説を描き始める。『吼える密林』『日東の冒険王』等は雑誌連載を中心に、少年読者の熱狂的な支持を受けた。『少年倶楽部』の紙面上に同じ作家の作品ばかり並ぶのは困るということから、筆名を変え、冒険小説家南洋一郎が誕生し、以後伝記作家・池田宣政、冒険小説家・南洋一郎として、戦前戦後に渡り、50数年余り人気作家として活躍する。

5. 終わりに

1867~1874年に刊行されたアンデルセンの4冊の本は、デンマークの収集家 Laage-Petersen が50年間所蔵し、作家池田宣政に贈られた。70年余、宣政が生涯最も大切にされたこの4冊は、ご遺族により2001年、当館に寄贈された。「童話の王様」として、現在も世界中で愛読され、また児童文学作家、絵本作家に贈られる最高の賞「国際アンデルセン賞」にもその名を冠すアンデルセンの著作が、日本の戦前戦後を通じて活躍した児童文学者池田宣政の所蔵を経て、国際子ども図書館の蔵書となったことは、今後の当館の方向を示しているようで大変意義深く感じる。

なお、本稿に関して、国立国会図書館図書部主任司書の折田洋晴から調査協力を受けた。

参考文献

- 『日本児童文学大事典』 大阪国際児童文学館編 大日本図書 1993年
- 「四十年目の手紙」 池田宣政著（『児童文芸』vol. 16 No. 1 1970年6月 日本児童文芸家協会）
- 「一人二役の思い出」 池田宣政著（『児童文芸』vol. 9 No. 3 1964年3月）
- “Lexikon des gesamten Buchwesens” Stuttgart A. Hiersemann 1985
- 「アンデルセン作品のデンマークの挿絵画家たち」 山内清子著（『アンデルセン研究』第4号 昭和60年5月 日本アンデルセン協会）
- 『完訳アンデルセン童話集』全7巻 大畑末吉訳 岩波書店 1981年
- 『アンデルセンの生涯』 山室静著 新潮社 1975年

（すぎやま きくこ 資料情報課）

国際子ども図書館の見学

1. はじめに

国際子ども図書館は2000年5月5日「こどもの日」に開館し、2001年12月までに13万人の方々にお越しいただいた。子どもから大人まで、幅広い年齢の来館者のなかには図書館資料を利用する方のほか、見学・参観のため訪問する方も多い。その見学目的はさまざまであるが、国際子ども図書館では、新しく開館した図書館の活動を多くの方に伝えるため、開館以来、積極的に見学者を受け入れてきた。

2. 見学者を迎えるにあたって

国際子ども図書館は国立国会図書館の支部図書館であり、子どもの本の専門図書館として「子どもと本のふれあいの場」の提供を目的にサービスを行っている。国立の図書館として資料の永久保存という機能を有するため、個人への貸出は行っていない。また周囲に住宅地も少なく、子どもにとって日常的に利用できる場所とは言にくい。しかしながら、親子連れや修学旅行・校外学習等の児童生徒が多く集う上野動物園、国立科学博物館をはじめ東京国立博物館、東京都美術館などのある上野の山文化ゾーンに位置しており、全国から多くの人たちに訪れてもらえる可能性を持っている。

一方、国際子ども図書館は建物としての魅力も備えている。東京都の歴史的建造物に指定されている建物は、明治39（1906）年に創建された「帝国図書館」にさかのぼることができる。明治期の建物を保存・改修すると同時に新しい技術を活用した建築は、当館の大きな特徴になっている。非日常的な雰囲気の外観と内装は、見学に来る子どもたちの経験を思い出深いものにすることができる。見学に来た中学生も「重厚な建物に、図書館というイメージを覆された」、「明治の建物の美しさに驚いた」という感想を述べていた。また、高校で建築を学んでいる生徒から建築の専門家まで、壁や天井、家具類を丹念に見ていた姿が印象的であるように、大人の方たちも惹きつける力を持っている。

このような建物の魅力と上野公園という立地条件を有する国際子ども図書館に全国から多くの人々に来てもらい、読書の楽しさを伝え、図書館の世界に親しむきっかけを提供することができればと考えている。

3. 見学の実際<子ども編>

国際子ども図書館は、2001年1月から12月までの間に25件519名の子どもの見学者を受け入れた。この2年間はスペース等の制約により、一度に多くの人数を受け

入れることができず、幼稚園児では40名程度、中学生で20名前後を受け入れるのが限度という中での見学であった。

当館における子どもの見学の一番の特色は、修学旅行での見学が多いことである。修学旅行シーズンの10月・11月で見学人数全体の40%に当たる197名を受け入れた。特に中学校の修学旅行の見学は、関東地方以外の遠隔地から来る割合が多く、全体の4割を占めた。

国際子ども図書館では、学年や目的によって見学の対応を変えている。見学の中学生に比較的多かったのは「総合学習の時間」の一環として、当館で「国際理解」について学習したいという申込みであった。残念ながら部分開館の現状で提供できる資料が少なかったため、要望に添えないこともあった。また、職業教育の職場訪問の一環として、司書の仕事について知りたいというものも目立った。

申し込み者の方で目的や要望がない場合には、用意してあるプログラムで案内をしてきた。小学生には、職員が図書館の歴史などの説明をしてから、子どもの部屋で絵本の紹介や読み聞かせを行い、ミュージアムで開催中の展示会を案内したり、課題を出して調べ方を学んでもらったりした。子どもの部屋の本を楽しむ時間はできる限り多く取った。中学生には、当館の歴史や現況（蔵書数、入館者数など統計的な数値を含む）を説明、外国の絵本や、外国語に翻訳された日本の絵本などを紹介した。その後、開催中の展示会を案内してから自由時間とした。子どもたちに有意義で楽しい見学の時間を過ごしてもらうため、学校側と密に連絡を取ることも心掛けた。見学に来る子どもたちがどのような要望を持っているかの把握につとめ、見学に来る学校の地域に関する情報、特に子どもたちの住む町や身近な図書館の様子、日常の図書館利用の状況などは事前に時間の許す限り調べた。見学の導入部分で、住んでいる町や、図書館について話をすると子どもたちが話に興味を持ち、日常的に利用する公共図書館や学校図書館とを結び付けて考えやすくなる。

このような事前の十分な準備と同様、見学終了後の反省は欠かせない。見学は子どもたちとのやり取りで流れが決まる部分も多い。ある子どもたちに好評だった絵本が、別の子どもたちはつまらなさそうに聞いているということは度々あった。その原因は何だったか等をその都度話し合っている。子どもたちからの報告や礼状は、職員の反省にも役立つし、何よりも励みとなる。また、前年見学にきた学校が「楽しかった」と今年も来館してくれたこともうれしいことである。

4. 見学の実際<大人編>

国際子ども図書館はまた、子どもをとりまく大人への図書館サービスにも力を入れている。子どもの本に関する資料・情報の提供を通して、児童書の研究や子どもと本に関わる活動をしている人々への支援がそれにあたる。そのため、大人の見学者の多くは子どもたちの読書環境の整備、児童書の普及活動を行っている方々で

あった。なかでも学校関係者の見学が目立ち、「学校図書館部会」、「国語部会」等に所属している教員の研修、学校図書館で活動している司書教諭・学校司書のグループが多数来館した。学校関係者からは「総合学習」が2002年度より本格的に実施されることに伴い、図書館活動を充実させていきたいとの声が多く聞かれた。公共図書館からも児童サービスの担当者を中心に図書館協議会委員やボランティア活動を行っている方が来館した。

見学者に対しては「国際子ども図書館」がいかなる図書館でどのような活動を行っているかを中心に紹介してきた。最初に建物の歴史的変遷に加え、図書館設立の経緯、基本的な役割、サービスの基盤などを説明した。

国際子ども図書館は子どもの本の専門図書館と述べたが、その名の持つ印象は人によって大きく異なる。「子ども図書館」という名称からは、子どもたちがのびのびと読書を楽しみ、さまざまな資料を使って調べものをする子ども専用の図書館というイメージを持って来館する方がいる。一方「専門図書館」というと、特定の分野の専門書・研究書を幅広く所蔵し、その分野を調査・研究している利用者を対象にした図書館の姿が想像されるようだ。国際子ども図書館は上記双方の役割を持つことを説明すると、あらためて納得される方も少なくない。



<エントランスの前での見学風景>

見学の中では続けて、現在の活動状況、図書館の利用方法、サービスについて説明を進めていく。国際子ども図書館が行っているサービスの柱として「所蔵資料の充実」、「情報の整備」、「電子図書館」、「展示会」を紹介する。

「所蔵資料の充実」に関して、国内の資料については納本制度に基づく収集、外国の資料については購入等による広範な蔵書構築、「情報整備」に関してはインターネット上でも提供している児童書総合目録について紹介する。加えて、特色のある図書館サービスとして絵本ギャラリーをはじめとした「電子図書館」の機能、ミュージアムにおいて行っている「展示会」についての説明をする。展示会に関しては、開館以来8回を数え、さまざまな角度から子どもの本を紹介してきた。館内を案内している際に、展示内容について細かく説明することはできないが、見学者の関心は高い。

最後に質疑応答を行い、職員の案内による見学を終える。

5. 今後に向けて

全面開館後は、ミュージアムも「本のミュージアム」としてさらに広がり、子ども向けの部屋も「子どものへや」「世界を知るへや」「おはなしのへや」の3つになり、資料も増え国際理解の分野での調べものにも対応できるようになる。「おはなしのへや」でのおはなし会、子ども向けミュージアムツアー、またブックトークを組みこむなど充実した楽しい見学としていきたい。これまで、学校が希望する見学はおよそ1時間で、見学に来た子どもたちは課題の答えを探すので精一杯になってしまい、用意した外国の絵本や建物を見る時間もとれなかったこともあり、残念であった。今後は、国際子ども図書館全体をじっくり楽しんでいってもらえる「滞在型」と呼べるような半日単位での見学もできないだろうか、と考えている。

職員にとって、見学の案内をすることはよい経験になる。図書館員を始め、地域で文庫活動を行っているグループなど、児童サービスの一線で活動している方々との意見交換は非常に有意義なものであった。また、子どもへの案内においても、説明に対する反応から子どもがどのような知識や興味を持っているかを知り、何より本を通じて多くの子どもたちとふれあう経験を積むことができる。

学校という場を離れて国際子ども図書館に来る子どもたちには、本の世界にふれて「楽しかった！」経験や思い出を持ちかえってほしい。これまで図書館に足を運ばなかったり、本にふれたりする機会がなかった子どもたちが、本に興味を持ってくれるようになり、見学の経験により学校図書館や公共図書館へ足を向けることにつながれば、と願っている。

この2年間は、多くの人に国際子ども図書館の存在を伝え、情報を発信していくまたとない期間であった。部分開館という制約の多い中での見学業務だったが、「面積が3倍に増える全面開館後を楽しみにしている。その時にはまた訪れたい」と温かい言葉をかけていただくことも何度かあった。工事がすべて終わり、裏庭も含めて図書館全体が完成した折には、読書をしたり調べものをしたりする場所であるとともに「くつろぎの場」としても使っていただきたい。

今後は、これまでの反省を踏まえつつ、新たな空間を有効に活用し、さらに多くの方たちに全国から、また世界から国際子ども図書館を訪れていただける「子どもと本のふれあいの場」を目指していきたい。

(企画協力課企画係、資料情報課児童サービス係)

国際子ども図書館建物の話 (旧帝国図書館時代)

現在の国際子ども図書館の建物は、もとは帝国図書館として、鹿鳴館やニコライ堂の設計で知られるJ・コンドルに師事した文部省技師久留正道らによって設計された。この設計にあたり、工学士真水英夫氏がわざわざ米国に調査のため出張してきたとある。そしてシカゴ市の私立ニューベリー図書館（1887年創立）、ボストン公共図書館（1848年創立）を参考に帝国図書館は設計されたのである。明治39年に第一期工事、昭和4年に第二期工事が完成し、現在の建物はこの部分を保存再生して、さらに現代建築による増築部分をつけ加えて完成した。

ルネサンス様式として知られる代表的な明治期洋風建築で、その外観は東京都選定歴史的建造物に定められている。内装も天井の漆喰による意匠や、貴賓室として使われた部屋の寄木細工の床（現在は世界を知るへや）も創建当時の姿を垣間見せている。

明治39年2月26日の東京朝日新聞では「大図書館が上野に落成」と記事にされている。同年3月21日には前日の開館式の様子が書かれていた。明治40年5月17日の新聞「日本」によれば、「最近東洋に於ける三大建築として、東宮新御所、東宮殿下御慶事記念美術館及び帝国図書館…」と挙げられている。

この建物は当初の計画の3分の1の姿にとどまったまま現在に至っている。第一期工事は明治32年に正式着工しているが、その後日露戦争が勃発、その戦費のための予算削減により当初の設計の4分の1だけを完成させ開館した。昭和に入って第二期工事が行われ3分の1が完成したが、以降、第二次世界大戦によって計画が中断してしまった。こうして帝国図書館は二つの戦争によって、完成することはなかったのである。



帝国図書館



ニューベリー図書館

(市原美奈子)

国際子ども図書館ミュージアムの展開 - 「はぐくみ」と「結び」へ-

非常勤調査員（展示担当） 服部比呂美

国際子ども図書館では、人と本とをより強く関係付けることを理念にミュージアムが設置された。図書館に小展示コーナーを設け、新収蔵資料や所蔵資料の展示を行う館は多いが、国際子ども図書館では、この展示機能を重要な活動の一つとして位置付け、「国際子ども図書館ミュージアム」として独自の活動を展開させてきた。平成14年5月、全面開館とともにスペースを拡張し、新たに「本のミュージアム」が誕生する。これを良い機会として、国際子ども図書館ミュージアムにおける今後の展示展開について、検討を加えてみたい。

一般的に、ミュージアムには①収集②保存③調査・研究④教育の主機能があげられ、展示は④の教育機能の中心に据えられたものである。展示とは、単に資料を並べて見せるのではなく、目的や必然性を持たせた資料の展覧によって、資料の価値を引き出し、利用者の知的好奇心を満たす教育的機能を持つものでなければならない。

資料の価値は、所蔵されている資料によってさまざまである。国宝級の資料は、その稀少性や美術性などによって、評価が与えられている。しかし子ども図書館の資料は、基本的には、その綿密な調査・研究によって与えられる創造的な価値に支えられるものが大半であるといえる。展示に関わる者の使命は、その資料性や作品の創造性をより多く発見することである。従来、図書館では図書を特定するための書誌事項調査が為されているが、展示を構築するためには、個々の資料内容により細やかに接しながら調査をしなければならない。

例えば資料の大きさや装丁のみならず、その作品の背後にある時代思想や歴史的な意義、また、著者名や画家名、翻訳者名ばかりではなく、作者と作品の位置付けを考慮する。所蔵者については、殊にコレクション資料の場合、その創始期に目を見開かされるようなエピソードを持つことが多いことから、不可欠な調査項目である。本は基本的に手の中に収まる程度の大きさである。しかし、本の中に込められた想いととも、人の手から手へ引き継がれた重さは、測り知れない。

ミュージアムでの展示企画は、調査によって導かれた資料の多様な価値の中から、観覧者に提供する部分を選び出すという「調査優先」の姿勢から始まることが基本である。しかし、当館の所蔵資料数は20万冊を超え、さらに年々増加する一方であることから、基本通りに展示を企画するのはなかなか難しい。そこで、図書館の展示企画において重要なのは、展示担当者が自分なりの展示テーマを探すことを念頭におきながら、図書館での日常業務に臨むことであろう。つまり展示テーマの検討や設定は、図書の受け入れ作業や新聞記事のチェック、レファレンスの解答の中など、図書館におけるあらゆる業務の中で継続的に為されている。その中から図書館の理念と合致したテーマを企画・検討し、収蔵資料の中から展示資料を調査・研究

し、再び展示テーマを検討しながら具体的に展示を構成していくことができる。利用者があってこそ存在意義を持つことを理解している図書館では、ミュージアムの展示においても、観覧者を無視した一人よがりの展示ではなく、より多くの観覧者が共感できる展示が要求されてくることは当然である。

こうした考え方に基づく展示の一例として、平成13年度に開催された「本にえがかれた動物」展を紹介しておく。この展示は「子どもの部屋」で子どもたちが目を輝かせながら手に取る絵本の中には動物が描かれたものが多いことや、動物が主人公となっている絵本には、歳月を経て読み継がれている本が多いことから、立案されたものである。

動物に関する本に絞り込んで調査を進める中で、ギリシャの「イソップ寓話集」などが紀元前には誕生していることを再認識し、動物をテーマにした本の奥深さを実感していった。そのため、当初、主たる展覧対象者を低学年の児童と考えていたが、その設定を成人にまで引き上げた。これによって、日本で最初の図譜（日本で図鑑という言葉が使用されたのは1904年以降）『訓蒙図彙』と、ベルトウーフが1790年ドイツで刊行した子ども向けの図鑑『子どものための絵本』とを比較する展示ケースを設け、利用者に当館所蔵の貴重な資料を公開する機会を作った。一方、展覧対象者を成人にまで引き上げたことで、資料の解説文をやや長めに設定した。これは図録を発行しないことに対する配慮でもある。しかしこのことで、子どもたちにとっては難解となることが考えられたので、対策として、展示室に手に取れる絵本のコーナーを設け、上野動物園から借用した写真を70インチの画面にスライドショー形式で流すよう工夫し、動物に関するクイズの答えを動物のミニチュアとともに発見させたり、休憩用の椅子を動物の形にして楽しんでもらえるような仕掛けを作った。これによって、幅広い利用者に充足感を与えようとする館の姿勢は、観覧者に対するアンケートの解答を見ていくと、概ね理解されていたのがわかる。

展示担当者は、展示終了後もこれらの経験をレファレンスサービスに活かせることは間違いない。画一的な回答ではなく、展示のための調査によって得た情報の蓄積から、それぞれの利用者に合わせた回答を用意することができるであろうし、適切な関連図書資料へと案内することが可能である。さらに、資料の現状を把握したことで、今後の収集計画や新たなレファレンスツールを構築するための目安が得られたのではないだろうか。このように展示そののみを切り離して考えず、図書館全般の業務とリンクさせていくことによって、館全体が活性化することだろう。

ここまで、国際子ども図書館ミュージアムの展示について、平成13年度に行った一つの展示を事例に述べてきたが、子どもを取り巻くさまざまな問題が社会で検討され始めている今、それらの問題に呼応し、子どもたちに向けた新しい情報提供機能をこのミュージアムの展示に持たせることが必要なのではないだろうか。

例えば大きな社会問題の一つとして、子どもの読書離れが上げられている。昨年

末に「子どもの読書活動の推進に関する法律」が施行されたことは、この問題の深刻さを物語っている。

こうした問題に対する新たな展示の機能として、展示を「はぐくみの場」と位置付けることを考えたい。そこでは、子どもたちに本を読ませるといふ、短絡的で高圧的な姿勢ではなく、子どもたちが自ら必要な創造力や好奇心の芽をはぐくむことができる世界を構築するという気持ちを精一杯込める。子どもたちに自発的に本を読もうとする気持ちが芽生えることを願わずにはいられないが、その一つの機会にこうした展示がなればと考えている。図書館での「はぐくみの場」は、すでに公共図書館などではお話し会によって実践されている。子ども一人一人の顔を見ながら真剣に話を語る時、語り手と聞き手の間には、1本の張り詰めた糸が生じる。その糸の強い吸引力によって、子どもたちは感動（何かを感じて動く）し、本の世界に誘われて行くのではないだろうか。展示もこれと同じで、何かを学ばせるといふよりも、何かを感じてもらふ展示をその機能に発揮することを重要視していきたい。

そんな願いを込めて、平成14年5月から開催予定の全面開館記念展では「不思議の国の仲間たちー昔話から物語へー」展を企画した。展示では、伝承の物語から創作児童文学まで生き続けている不思議な者たちを取り上げる。この中から特に子どもたちに感じてほしいのは、目に見えないものを信じる心を失わないでほしいということである。不思議な者を「愛情」や「信頼」という言葉に置き換えてみてほしい。目の前の事実だけではなく、さらに奥にある真実を見る目を持つことによって、人間は自分とは異なる者の存在を認めることができる。そこを出発点として、子どもたちが異文化を理解し、真の国際人に育つよう手助けをすることは国際子ども図書館の大きな役割であると思っている。

もう一つの望まれる展示機能は、展示を子どもと本とを繋ぐ「結びの場」としていくことである。学校教育の場では、読書を通じて豊かな人間性を育む拠点として学校図書館を充実させることを決め、子どもたちが様々な資料から自ら学ぶ力を育てる「総合学習」に目を向け始めた。週5日制の導入に伴ない、ゆとりの時間の中から地域社会について学ぶという気運が高まることも予想され、図書館や博物館などの機関と学校が連携することへの期待は、今後ますます強まるに違いない。

国際子ども図書館でも、館全体で学校図書館へのサービスを強化していく方針だが、ミュージアムでは、展示に関するギャラリー・トーク、ワークショップ、講演会などを積極的に行うことで、子どもと本との結びの場を探っていきたくと考えている。たとえば絵巻物から絵本への変遷を展示し、子どもたちにただそれを見学させるだけでは結びの場としてはあまりにも心細い。見せるだけではなく、いわゆる「hands on」（手にとってみる）の展示で、子どもたちに複製の絵巻や本に直接触れさせながら、「本をめくる」という何気ない行為が、実は物語の場面展開に非常に大きな効果を与えていることなどを解説し、子どもたちに頁を繰ることの喜びを伝えることが「結びの場」としての役割ではないかと考えられる。

さらに国際子ども図書館では、地域図書館など他の機関とも「結び合い」ながらミュージアムでの展示を完成させていくことも必要である。国際子ども図書館までなかなか足を運べない地域に、出張展示という形で展示の貸し出しを行うことは、地域図書館への支援であると同時に、国際子ども図書館の存在意義が広く認知される機会にも繋がる。展示担当者にとっても、他館での展示に耐え得る内容の厚い展示を作り出すことは、ハードルが高い反面、大きな励みにもなるだろう。

図書館以外の機関と「結び合う」ことによって、我々だけでは知り得ない新鮮な情報を得られることも、館にとって大きな財産となる。前述の動物展では、上野動物園・東京動物園協会のご好意により、象の尻尾の毛や虎の爪など、数多くの動物の標本を提供していただいた。その際、動物園に関わる人の立場から、図書館における本の評価とは異なる視点で優れた本を示唆していただいたことは、その一例である。また、動物園終園後、象の体に直接接触していただいたが、その皮膚の柔らかさと温かさは今も忘れることが出来ない。このような質感を直接感じる行為の重要性を改めて実感したため、現在「不思議の国の仲間たち」展では、絵巻資料の複製製作を行い、手に取る展示を検討している。

図書館は利用者とともに、また社会の変化とともに成長する生き物である。新しいミュージアムは、明治39年創建の建物に移行するが、展示ケースの中に並べられた資料は、それ以上に歴史を重ねている。資料を預かる者は常に資料の声に耳を傾け、その声を未来に伝えるという重い責任を負っている。このことを念頭に置きながら、これからも展示展開ということの中に新しい課題を見つけたいと思っている。

アンケート集計結果報告

「本にえがかれた動物」展（平成13年9月8日～12月22日、開催日数87日、観覧者数8,692名）では、展示会場において、観覧者にアンケートを実施した。このアンケートは強制ではなく、あくまでも観覧者が自発的に記入したものである。すべての観覧者がアンケートに答えてくれたわけではないが、今後の展示活動を考えていくための基礎資料にはなると考えられる。

（集計期間：平成13年10月1日～11月30日／回収数：131名）

【質問1】あなたの性別は ①男 57名 (38%) ②女 84名 (61%) ③無回答 1名

【質問2】あなたの年齢は 小学生以下 0名 小学生 64名 中学生 5名 高校生 3名
大学生 11名 20歳代 5名 30歳代 13名 40歳代 5名 50歳代 8名 60歳代 3名
70歳代・80歳代・90歳以上 0名 無回答 6名

【質問3】あなたのおすまいはどこですか

①東京都内 64% ②東京都以外 27% ③無回答 9%

【質問4】今回の展示を何でお知りになりましたか

①当館内 50% ②ホームページ 6% ③上野動物園 6% ④国立国会図書館 3%
⑤新聞雑誌 3% ⑥その他 17% ⑦無回答 15%

【質問5】 今までに国際子ども図書館ミュージアムの展示を観たことがありますか

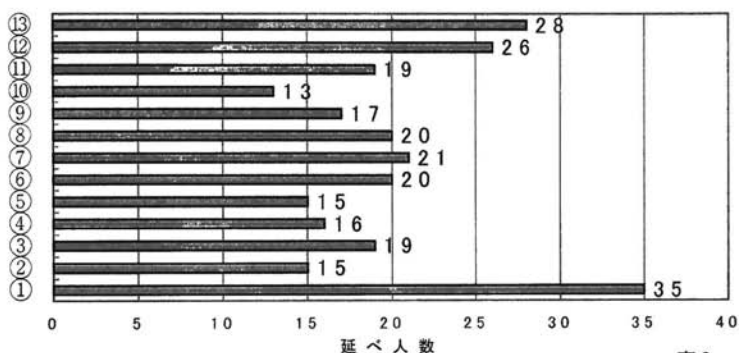
- ①初めて 86% ②初めてではない 14%

【質問6】 この展示会の印象はいかがでしたか

- ①大変面白かった 50% ②面白かった 28% ③ふつう 12% ④無回答 8%
⑤つまらなかった 0% ⑥非常につまらなかった 0%

【質問7】 この展示会で興味を持たれたコーナーはどれですか（複数回答可）

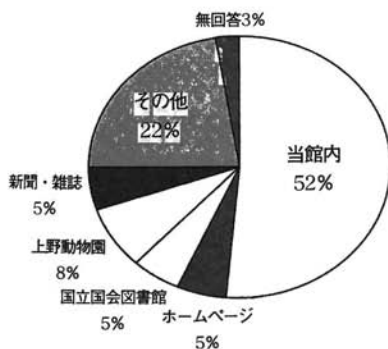
- ①イソップ寓話 ②ずっとともだち ③野生動物 ④子どもの図鑑 ⑤英米動物文学
⑥マザーグース ⑦日本の童謡 ⑧ちりめん本 ⑨動物絵本 ⑩蘆原コレクション
⑪動物園 ⑫動物の世界 ⑬動物の宝箱



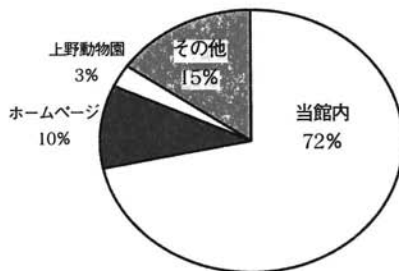
<表2>

【観覧者の居住地と情報認知方法】（質問3、質問4をクロス集計）

[東京都内在住] <表3-1>



[東京都外在住] <表3-2>



【各年齢層と関心を寄せる展示テーマ】(質問2、質問7をクロス集計)

コーナー	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	無回答
小学生	11	6	4	6	1	3	4	2	5		6	16	14	22
中学生	4	1	2	2	2	1	1	2	1	1	2	2	2	1
高校生	1		1		1	1					1			1
大学生	7	4	2	3	3	3	4	6	3	4	4	1	4	
20歳代	2			1	1	2	1	2	1	1				
30歳代	2	1	1	1		4	1	2	3		2	2	3	1
40歳代	3	1	2	2	1	3	2	2	1	1	2	2	1	
50歳代	3		3		1		2	2	2	2	1	1	1	
60歳代	2	2	2	1	2	2	3	2	1	3	1	1	1	
無回答			2	1	1	1	1			1				3
合計	35	15	19	17	13	20	19	20	17	13	19	25	26	28

(小学生未満、70歳代、80歳代は解答者なし) <表4>

アンケートに基づいて国際子ども図書館ミュージアムの観覧者の動向を見ていくと、<表1>に見られる30歳代・40歳代の観覧者の賑わみが、一つの傾向を示している。一般的なミュージアムにおける観覧者には、児童・生徒と高齢者の占める割合が高いことから考えると、これは当ミュージアムの特徴の一つと言える。大学生に関しては、図書館司書や保育関係資格取得を希望している学生の観覧が多く、30歳代は圧倒的に親子で観覧した際の保護者が占めている。今後も展示には、親子が関われる場面を盛り込んでいくことを念頭におかなければならない。

【質問5】から、観覧者の5割が図書館来館と同時に、ミュージアムでの展覧会を認知していることがわかる。これは図書館全体の入館者が増えればミュージアムの観覧者も増加するということを示す。また、新たな試みとして上野動物園で展覧会のチラシ設置依頼をしたことが、動物園で展覧会を認知した観覧者の数字に表れている。さらに、<表3-1、2>は【質問3】【質問4】の結果をクロス集計したもののだが、ここでは東京都外からの観覧者はホームページから情報を得ている比率が高いことに注目したい。これらを考え合わせると、図書館全体の広報活動は、さまざまな媒体や機関を通じてさらに強化していくことが必要であるといえよう。

【質問6】による観覧者の8割という動物展への好評価は、幅広い層の観覧者を考慮しながら動物展を構成した結果だと考えられる。<表2>では、観覧者の興味の対象を示しているが、この結果と【質問2】の観覧者の年齢層をクロス集計したものが<表4>である。ここに明らかなのは、観覧者がコーナー①イソップ寓話に年齢を問わず高い関心を寄せていることである。これからの展示計画の中にイソップ関係の資料中心の展示を検討することは、観覧者の期待に応えるものになるだろう。また、コーナー⑫動物の世界、⑬動物の宝箱は児童たちに高い支持を得ているが、これらは、児童のための「hands on」展示を目的に実践したものであった。その答えが数字として表れたことは、展示を「はぐくみの場」としていくことへの大きなステップとなった。

(はっとり ひろみ)

「絵本ギャラリー」への招待

「絵本ギャラリー」とは、絵本というジャンルの誕生から現在までの流れをデジタル・コンテンツで紹介することを内容とする国際子ども図書館の事業で、同館の「デジタル・ミュージアム」の中心となるプログラムです。

「絵本ギャラリー事業」は、国内外の貴重な絵本関連資料をデジタル・コンテンツとして収集し、情報資源の共有化を図るとともに、国際子ども図書館におけるデジタル・ミュージアム機能の充実を図ることを目的として、平成10年度以降、進めてきました。

「絵本ギャラリー」の展示プログラムは、絵本の歴史を、数千年に及ぶ長い人間の記録の歴史に重ね、絵本が実際に子どもたちの手に渡された約150年の短い記録に限定して振り返るもので、島多代氏（監修・構成）をはじめ多数の専門家の協力のもとに制作してきました。

その最初の企画が、絵入り雑誌や絵本が市民生活の中に積極的に取り入れられた19世紀後半の英国の絵本の世界を対象とした「絵本は舞台」であり、現在国際子ども図書館内のパソコン（一部はインターネット）で提供しています（絵本ギャラリー第一展示室）。また、平成14年5月に予定される国際子ども図書館の全面開館とともに、2つ目のプログラム「コドモノクニ・1920年代の日本 子どもたちを見つめた画家のまなざし」を公開し、「絵本は舞台」と同様、館内のパソコンとインターネットの両者を通じて提供する予定です（絵本ギャラリー第二展示室）。

19世紀後半以降の絵本の歴史は、世界各国でそれぞれ無関係に進行したのではなく、交通手段の発達と芸術活動の世界的な規模での展開に支えられて、世界的な「イメージの伝播・伝承」という形をとって発展しました。したがって、「絵本ギャラリー」で紹介するプログラムも、それぞれ無関係なものではなく、相互に緊密な関係を有しています。ここでは、そのような絵本の歴史をめぐる各地域、各時代間の相互関係も明らかにされます。

以下では、この2つのプログラムについて書かれた解説（第二展示室については未発表）を中心に内容を概観します。

「絵本は舞台—19世紀英国の3人の作家によるお話と童謡と詩の世界」

絵入り雑誌や絵本が市民生活の中に積極的に取り入れられた19世紀後半の英国の絵本の世界を紹介するプログラムです。

当時の英国は、産業革命の経済発展、新しい芸術運動、木版印刷の技術革新の時代を迎えており、この時代背景の中で、芸術的に質の高い絵本がポピュラーな知的商品として社会に普及し、数多くの絵本作家が登場しました。

長く英国で語り継がれてきた物語や歌を題材に華やかに絵本の舞台が開幕したこ

の時代を代表する作家のうち、ここで紹介するのは、ランドルフ・コルデコット、ケイト・グリーナウェイ、ウォルター・クレインの3人です。展示は、当時親たちが子どもたちに絵本を見せながら、お話を讀んだり、唄ったりしたそのままをページを繰りながら展開します。絵を見ながら、英語で語られる物語や歌を聞くことは、外国語との自然な出会いとしても重要な体験となることと思われます。

「コドモノクニ—1920年代の日本 子どもたちを見つめた画家のまなざし」

現在制作中のプログラムであり、平成14年5月の全面開館と同時に公開する予定です。

このプログラムは、1922（大正11）年1月に創刊された雑誌「コドモノクニ」の初期の10年間に掲載された約300枚の絵を中心に、日本の幼児教育の観点から、文学、音楽に次いで美術を子どもの芸術の中心に据えた絵雑誌の初めての取組みを示すもので、ここで活躍した絵本画家の作品や童謡、おはなしの紹介を通じて、子どもの本とその時代の芸術、思想、哲学との関係、時代の子どもの観などが明らかにされます。

『コドモノクニ』は、幼児を対象に絵、おはなし、童謡、舞踊、劇、工作を取り入れた芸術性豊かな絵雑誌として、『婦人画報』の出版元として知られる東京社より、創刊から1944（昭和19）年3月までの22年間にわたり発行されました。創刊当時の日本は大正デモクラシーの潮流に乗って、子どもの個性や自我を尊重しようとする新しい教育理念が旺盛でした。芸術が、人間としての理想的な生き方につながると信じ、そのために子どもにも純粋な表現を求める倉橋惣三が編集顧問となり、北原白秋、野口雨情が童謡顧問、中山晋平が音楽顧問、編集主任は和田古江、絵画主任は岡本帰一が務めました。

芸術が子どもの自由自在の想像力を養い、その人間性の完成のために貢献しうる最高の美術を提供するということが、「コドモノクニ」の編集方針でした。芸術が子どもの教育の最も重要な役割を担う領域を持つことを信じた当時の編集者と芸術家による貴重な記録、それを展示によって伝えることがこのプログラムの目的です。

館内版のプログラムは、「ギャラリー」「童謡」「おはなし」「解説」「年表」に分かれ、インターネット版は、これをよりコンパクトにまとめた形になっています。

特に、「コドモノクニ」の代表的な画家たちの作品を集めた「ギャラリー」では、子どもたちを見つめた画家たちが、芸術家としてどのような自由な表現をしたかが展示され、このプログラムの最も注目される部分となっています。

（山口 和人）

絵本ギャラリー

「絵本は舞台」アンケート調査結果

国際子ども図書館では、今後の「絵本ギャラリー」の新規プログラムの開発の参考に資するため、今回、CD-ROM版を作成し、アンケート調査を実施しました。このアンケートは、来年度以降の学校図書館に対するサービスの充実を計るため、全国の学校図書館69校を対象に実施されたものです。以下に、アンケート結果の概要を紹介いたします。

(アンケート調査の方法)

全国学校図書館協議会の協力を得て、アンケート協力校(小学校32校・中学校13校・高校22校・インターナショナルスクール2校)の募集・選定を行いました。アンケート校には、「絵本ギャラリー」CD-ROM版を郵送貸与し、自校のパソコンにインストール後、児童や生徒の方に利用して頂き、学校図書館の担当の先生や司書の方にその感想等を回答して頂きました。動作環境等の問題で、利用できなかった4校と、未返信なものが19校あり、以下46校のアンケート結果を報告します。

(アンケート結果の概要)

問1：このCD-ROM版「絵本ギャラリー」を見て面白かったか。

はい・いいえ・どちらともいえない

問2：この「絵本ギャラリー」を子どもたちにも薦めたいと思うか。

はい・いいえ・どちらともいえない

問3：貴校の学校図書館(図書室)にも導入したいと思うか。

はい・いいえ・どちらともいえない

問4：英語の学習や理解に役立つと思うか。 はい・いいえ・わからない

問5：1タイトルの本文全体の構成が長いと感じたものはあるか。 ある・ない

問6：画面(画像)は見やすかったか。 はい・ふつう・いいえ

問7：文字(文章)は見やすかったか。 はい・ふつう・いいえ

	はい ある	いいえ ない	どちらともいえない わからない ふつう	不明	回答なし
問1	29(63%)	5(11)	11(24)	1(2)	—
問2	20(43)	7(15)	18(39)	1(2)	—
問3	17(37)	6(13)	22(48)	1(2)	—
問4	32(70)	5(11)	7(15)	1(2)	1(2)
問5	31(67)	14(30)	—	—	1(2)
問6	20(43)	3(7)	21(46)	2(4)	—
問7	5(11)	25(54)	16(35)	—	—

(%)小数点以下四捨五入

《以下の設問は回答より抜粋》

問8：「絵本は舞台」の印象について

- ・英語も音楽も良い音で、大人向けには興味深い内容だったが、子供にはわかりにくいと思った。
- ・絵本に興味があり、英語が好きな人にはおもしろいと思うが、時代のせいで画面が古典的で、文字の字体が読みにくく、小さいので、むしろ音声を生かす目的で捉える方が活用できると思う。
- ・英国の絵本の雰囲気がよく出ていると思う。マザーグースのように親しみやすい題材で、子供たちは容易に英国文化に触れることができると思う。

問9：ページ操作で不満な点や改善してほしい点

- ・動作環境のせい、左下のボタンの文字がほとんど見えず、難しかった。
- ・表紙からではなく、どこからでもトップページにもどれると扱いやすい。終了の仕方がわからなかった。
- ・画面の中に各ページを示す目次のような欄があり、そこに各ページへのリンクが張ってあると戻りたいページや優先的に観たいページへ跳びやすいと思う。

問10：ページ操作でつまずいたり、迷ったりした箇所

- ・無音でページを鑑賞するだけなのか、朗読が有るのか、音楽が流れるのか等が判りづらいので、「朗読有り」や「演奏有り」などの表示があれば良い。
- ・ランドルフ・コルデコットはクリックしても画像が現れなかった。
- ・どこでそのページが終わるのかわからない。何か、そのページの終わりがわかる合図があるといいと思えた。

問11：「この作家について」(作家についての説明)のページで不満な点や改善してほしい点

- ・小学生では、作家についての説明はいらぬのでは。作品にたくさんふれることによって、作品から作家のことを理解すると思う。難しいことより作品から。
- ・文字が小さく詰まりすぎて読みづらい。もっと精選した読み易いものがよい。
- ・本の表紙だけでなく、作家の肖像画やエピソード等があれば親しみ易いと思う。

問12：個々の作品のページについて不満な点や改善してほしい点

- ・イソップが面白いと思ったが字が小さすぎる。
- ・「三つ子」「赤ん坊の花束」は表紙だけでなく、興味の持てそうなページが一部でも紹介されていれば、より関心が持てると思う。
- ・長文の英文については、読んでいる言葉が理解できるよう色に変化をつけてはどうか。朗読部分はさし絵のように文字も大きくしてほしい。
- ・読んでいる英文にアンダーラインなどがあるとわかり易いと思う。

問13：その他、不満な点や改善してほしい点、感想等

- ・インストールのところが難しかった。
- ・電子メディアで残す意義はあるが、個々に味わうには、本そのものの復刻版の方が趣が伝わるように思う。
- ・画面にそのタイトル全ページ数の中の何ページ目かという表示が欲しい。
- ・アナウンスがあるものとなないものがあり、意図がわかりにくい。説明の日本語は子供向けになっていない。もっと親しみ深い表現の方が子供の心をひきつけると思う。また、英文の訳は全文あった方がよい。

問14：国際子ども図書館の学校図書館への協力事業に関して、学校図書館の立場から期待するサービス内容や要望

- ・ある程度まとまった数の本の貸し出し。特に外国の絵本など。
- ・国際子ども図書館通信のような冊子が、定期的にあればと思う。司書の方々にメールを通じて、ゲストティーチャーの形で子ども達の学習をサポートしてもらえたり、指導者の相談にのってもらえるとありがたい。
- ・夏休み等に、児童文学や学校図書館に関する講演会や、短期講座があるとよい。
- ・現在入手できない本（絶版本）などを集めて、いつでも見られるようにしてあるとありがたい。
- ・小学生から高校生の頃までに読んでほしい本のリストの作成や、外国と日本の子どもたちの読書意識等について調査研究し情報を公開してほしい。
- ・新刊の良書の紹介や教科学習との関わりのある本の紹介をしてほしい。

問15：今後、ホームページで公開して欲しい情報や作品（ジャンル）

- ・世界の児童書（主に絵本）を見たり読んだりすることで、他国の文化に触れさせたい。国内ではどのような原書が手に入るかというような情報があれば利用させてもらいたい。
- ・アジア・アフリカなど、日本で目にすることが少ない国の絵本・児童書。
- ・もっと子どもに親しめる、日本の絵本の電子本を見てみたい。

（アンケート結果の分析と、今後の課題について）

インストール方法や操作方法の簡便化を求める意見を多数頂戴しました。特に、文字の見やすさや、文章中の朗読個所の表示法などについて、改善すべき点があります。音楽については概ね好評でしたが、プログラムは子どもたちを対象とするには難しいとの意見も寄せられました。これらの意見は、「絵本ギャラリー」の改良と普及方法の検討、日本の大正期の絵雑誌「コドモノクニ」で構成される新規プログラムの作成に活かしていきます。末筆ながら、アンケートにご協力頂いた学校図書館の司書や先生方および、アンケート校の募集・選定にご協力いただいた全国学校図書館協議会に対し、この場をお借りしてお礼申し上げます。

投槍像裏話



間もなく皆さんに再度お目見えすることとなる投槍像は、当館の裏庭にある。この像は高桑文雄氏の作である。

碑文によると、

「投槍は昭和十年十月第三部展覧會に特選されたる高桑文雄君の傑作なり 君は明治四拾三年八月十七日 富山県東岩瀬町に生る 父名は一政 母なほ子 幼にして父を喪ひ 祖母八重子刀自の手に育てらる 十八才東京に出て彫塑家小倉右一郎先生の門に入り 精勵刻苦 技大に進む 昨春二月 急性中耳炎に罹り忽として十二日 歿す 享年二十八才なり

噫往者は返るの期なきも 幸に遺作のあるなり 以って世に伝ふへき哉
昭和十二年八月 近親者一同」

とある。やはり当館が所蔵する小泉八雲の金属製浮彫像を嵌め込んだ台上に「密」と題した幼児の群れる像の噴水は、碑文中にも記されている小倉氏の作品である。その縁もあって、小倉氏と高桑氏の遺族の相談によって当館に寄贈されたといういきさつがある。

実はこの像、槍がなかった。戦後、盗難にあい、以来代替品が据えられてきた。しかし上野図書館が国際子ども図書館として生まれ変わったのを期に、同じ像を所蔵する富山県高岡文化ホール所蔵の槍を借用しレプリカを作成し、平成14年5月5日こどもの日に完全な姿で再登場する。

ちなみに、小泉八雲記念碑と噴水「密」もまた全面開館時には前庭に復元される。

参考文献：東岩瀬郷土史会会報 No. 42

(市原美奈子)

アジア地域との連携へ向けて—アジア児童図書館員会議2001から— 佐藤 尚子

アジア児童図書館員会議2001 (Asian Congress of Children's Librarians 2001)

2001年(平成13年)11月、シンガポール共和国において同国立図書館(National Library Board)が開催したアジア児童図書館員会議2001に参加した。会議の概要等については、『国立国会図書館月報』平成14年2月号(No. 491)をご覧ください。できれば幸いであるが、3日間にわたるこの会議は、子どもの教育に携わる人々や図書館員などの専門家により、子どもたちの読書、学習、発見を育てるための問題や今後の課題などを議論するもので、主にシンガポール、また中国、マレーシア、フィリピン等からのべ300名程の参加があった。

児童図書賞とアジアの児童書出版の状況

この会議の3日目、マレーシア国立語学文学研究所の Izzah Abdul Aziz さんが「受賞したアジアの児童図書の紹介」と題する以下のような発表をされた。

「図書賞は、著者、画家、出版者等を顕彰するのは勿論のことであるが、文学の発展に貢献し、受賞図書を通じて様々な時代の趨勢を知ることができ、出版の水準と品質を高めることができるものである。グローバル時代にあつて、子どもたちは、アジアや西洋の友人たちがどのような存在であるかを知る必要があるが、受賞作品を読むことは、アジアの読者が自己の地域の作者や絵本画家について知り、アジアの文学と文化を理解し、学ぶことの助けになる。しかしながら、アジアの出版状況は、多くの国が未だに発展途上か未発展の状態にある。例えばケイト・グリーンウェイ賞、コルデコット賞のような欧米諸国の児童図書賞の作品は日本のような先進国ではほとんど翻訳されているが、マレーシアにおいては、英語版が売られていても高価で、母国語で書かれてもいないため、普通の親はそれらを買うことはない。児童書のための賞を設けたり、アンデルセン賞を獲得した国もあるが、これらの作品はアジアで流通することはなく、子どもがそれを読むことはできない。また、多くの国が、教科書等の出版を優先しているため、これらの国の子どもたちは、児童文学なかでも受賞図書に触れる機会に恵まれないという状況である。」

Aziz さんは、近隣諸国との流通は困難な状態にあるアジアの出版状況について話され、未だに質の高い図書から隔離されているアジアの子どもたちが、東西のまた近隣アジアからの良質の本すなわち受賞図書を楽しめるようにするために、①アジアの受賞図書の共同出版または共同版の事業を実施するため、政府間レベルで共同ネットワークを開設、②アジア児童賞受賞図書のウェブサイト開設、③メディアやインターネット等による受賞図書の著者、挿絵画家等の情報の普及、④図書の輸出入に関する政府の政策を確立させる、⑤受賞図書が翻訳されアクセスできるデジタル図書館を開設、という提案を行われた。

「アジアの十字路」と言われ、中国系・マレー系・インド系の儒教・イスラム・ヒンズー教の人々が共存する近代都市シンガポールの会議において、最も「アジア」の実状が伺える報告であった。

国際子ども図書館の国際的な連携協力

国の中央図書館として設立された国際子ども図書館は、国際的な意義を持っている。各国の児童書のナショナルセンターや読書普及組織との連携のもとに、子どもたちに本を手渡し、子どもの本を通じた異文化理解に貢献するということである。

5月の全面開館においては、「世界を知るへや」を設けて、子どもたちが世界に興味や関心を抱き、国際理解を深めるような各国と地域の地理、歴史、民俗等に関する資料や海外の絵本等を配置する。また、平成14年度半ばから開始する学校図書館への「貸出セット」もそのテーマを先ず「国際理解」とする予定である。

通年で開催してきた展示会においても、アジア、アメリカ、北欧、カナダと各国や地域の子どもの本の紹介を行ってきたが、今後もそれを継続していく。さらにその出展資料を展示会貸出として、国内また国外にも貸し出すことを考えている。

図書館の活動のもととなるのは、何と言っても蔵書であるが、特にアジアの絵本等については、その収集には様々な困難を伴うが、積極的に進めたいと思っている。

ホームページにおいては、「海外で翻訳出版された日本の子どもの本」の情報をJBBY、児童図書出版協会等の協力により、全面開館時から掲載していく。その他、日本や外国の児童書・児童図書館の動向を発信していきたいとも考えている。

すでにホームページで提供している「世界の子ども世界のことば」は、特にアジアの子どもたちに、各国の文化や風土をその国の言語で伝えることによって、国際理解・国際交流を促進する一助とすることを目的としたものである。国際識字年を機に、ユネスコ・アジア文化センターがユネスコと協力して作り上げた絵本を、絵、音、文字のデジタルデータで表現している。これを拡充し世界の子どもたちに提供していくことを計画している。

2000年5月に当館で開催した国際シンポジウムで松岡享子氏も述べられたように、国際子ども図書館の「国際」は「平和」ということでもあろう。「世界平和に寄与すること」*は国立国会図書館の設立理念でもある。アメリカ合衆国テロ事件後、学校で読み聞かせをしている母親からのレファレンスの中に「アフガンの子どもたちは銃でなく本を手にしてほしい」という言葉もあったが、平和であるからこそ子どもが本を読める。平和であるためには、子どもたちに他の国の社会・文化を理解してもらいたい。子どもたちの「異文化理解」をひとつの柱とし、関連機関とも協力して、国際連携協力をまた図書館活動を進めていきたい。

*「真理がわれらを自由にするという確信に立って、憲法の誓約する日本の民主化と世界平和とに寄与することを使命として、ここに設立される」（「国立国会図書館法」前文）

活動報告

(平成13年1月～12月)

1. 展示会

国際子ども図書館では、子どもの本の楽しい世界を紹介することを目的として、子どもの本・文化に関する展示会を3階「ミュージアム」で行ってきた。

開館2年目にあたる平成13年は、3回の展示会を開催した。

期間	展示会	入場者数	開催日数
平成13年 2/10(土) ～4/8(日)	i Hola, amigos! ーやあ!ともだちー 中南米の子どもの本展	6,452人	48日
4/14(土) ～9/2(日)	O CANADA ーカナダの子ども・文化・自然ー	15,667人	118日
9/8(土) ～12/22(土)	本にえがかれた動物展	8,692人	87日

○『i Hola, amigos! ーやあ!ともだちー 中南米の子どもの本展』

日本と反対側にある中南米の国々。気候、風土、生活習慣が日本と大きく異なる中南米の国々の本約140冊を展示し、あわせて中南米の人々の暮らし、動物、植物などを紹介した。

本展示では、平成11年度に国立国会図書館が国際交流基金と共催した「中南米子ども図書館関係者グループ招へい事業」の招へい国（アルゼンチン・ブラジル・チリ・コロンビア・メキシコ・ペルー・ベネズエラ）の7か国にしほり、当館所蔵資料と(財)ユネスコ・アジア文化センターや(財)日本スペイン協会から借用の写真等を国別に展示した。



展示資料のなかには2000年の国際アンデルセン賞作家賞を受賞したアナ・マリア・マチャド（ブラジル）の作品、ノーベル文学賞を受賞した詩人ガブリエル・ミストラル（チリ）が子どものために書いた詩の本、アルゼンチンの聖書とも呼ばれ、子どもたちが学校で必ず読む「A saga do gaúcho, Martin Fierro」も含まれていた。

○『O CANADA ーカナダの子ども・文化・自然ー』

世界で2番目に大きな国土を有するカナダは、豊かな自然と世界中から移り住んだ人たちによってもたらされた多文化、多民族の国である。このような特徴からカナダは「モザイクの国」とも呼ばれている。

展示会では平成12年度にサイモン・フレーザー大学から寄贈されたカナダの子ども本のコレクション約280冊を様々な角度から紹介した。展示期間中に資料の入れ替えを行い、一部を4階子ども部屋に配架した。また、より深くカナダについて紹介するため、地理・歴史・文化・自然・子どもたちの生活といったテーマごとに写真・パネルなどを展示した。

なお、展示会初日には開会記念式典を行い、本展開催にあたり多大な協力をいただいたカナダ大使館に対し、国立国会図書館から感謝状を贈呈した。同日、カナダ大使館シアターにおいて「カナダの絵本ー異文化と共存するカナダの子ども達ー」と題する講演会を行った。



○『本にえがかれた動物展』

有史以前から、人は動物と共に生きてきた。フィクション、ノンフィクションを問わず、多くの動物を主人公にした作品が長い時間を経て読み継がれている。そして、今も昔も、多くの子どもたちは、身近でなじみ深い動物たちに導かれて、読書の楽しさを知っていく。

展示会では、時代を越え国境を越えて、さまざまなかたちに描かれてきた動物の本を約180冊展示した。国際子ども図書館が所蔵する貴重な「イングラム・コレク

ション」、18世紀後半から19世紀初等にかけてドイツで出版された子どものための百科事典—ベルトゥーフの『子どものための絵本』(写真左)、日本のちりめん本や童謡に出てくるなじみのある動物たちも紹介した。また、国立国会図書館所蔵の蘆原英了(あしはらえいりょう)コレクションから、サーカスや動物園で活躍する動物をえがいた作品も展示した。



<展示会場>

これまで展示会をお届けしてきた3階「ミュージアム」は、平成14年5月5日以降「ホール」と名称を変え、様々なイベントが開催される。展示会場は、明治期改修部分に新たに誕生する「本のミュージアム」に移る。



3階 本のミュージアム
(改修中の様子)

2. 子どもの部屋の活動

4階の「子どもの部屋」は、「子どもたちが本と楽しくふれあう部屋」であるために、本に興味を持ってもらえるよう、さまざまな工夫をしている。絵本の主人公のぬいぐるみを飾ったり、詩の抜書きの展示をしたり、職員手作りのパズルなど置いたりといくつかあるが、そのなかでテーマに沿った本を集めて展示しているのが、「小展示」と呼ばれるものである。普段は書架で背を向けて並んでいる本も、表紙を見せる展示をすることで、絵本の絵の美しさが引き立ち、子どもたちも本を手に取りやすくなるようである。

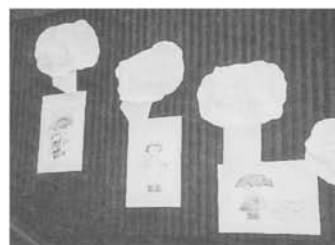


<小展示テーマ一覧>



- 「ふゆ・ゆき・きたかぜ」(1月から2月)
寒い季節でも、元気の出る絵本を並べた。
- 「むかしむかしへびは・・・」(1月から3月)
巳年を迎えて、へびが活躍する日本の昔話を中心に展示した。
- 「ABCの本」(3月から5月)
世界各国のABCの本を展示。いろいろな国のいろいろな言葉が並んだ。

- 「O CANADA ーカナダの子ども・文化・自然ー」(4月から9月)
本展示会において1期と2期に分けて展示した本を、手に取れるように、子どもの部屋に置いた。



- 「あめがふる」(6月から7月)
昨年は梅雨明けが早く、7月最初には撒收せざるを得なかった「あめ」の絵本である。

○「けっこんしき」(6月から8月)

『しろいうさぎとくろいうさぎ』のような正統派の絵本から、『みにくいシユレック』のような個性的な絵本まで並んだ。

○「戦争を忘れないために」(7月から8月)

このテーマでの小展示をしなくていい日がくることを願って毎年選書している。

○「いろんな国の絵本を読もう」(7月から9月)

12ヶ国の絵本を展示し、お話の内容を題材にしたクイズに挑戦してもらった。正解の子どもには、プレゼントがあった。

○「おいしくたべよう」(10月から11月)

木の実やりんごなど、秋の食べ物を中心に、食べ物に関する絵本を並べた。



○「よるになると」(9月から11月)

秋の夜長にふさわしく、夜空の星や月、夜行列車、おばけの話、そして子どもの初めてのお泊りの話など、さまざまな“よる”にまつわる本を揃えた。子どもたちには『やこうれっしゃ』『ねないこだれだ』が大人気であった。

○「本にえがかれた動物展」(9月から12月)

展示会に関連した資料を子どもの部屋に並べた。中でも『アンディとらいおん』は見学に来た小学生に読み聞かせをしたところ大好評であった。



○「クリスマスのえほん」(12月)

クリスマスにちなんだ絵本を集めた。しかけ絵本など、楽しいものもある。

3. イベント

「本!ほん!!ホン!!!」と題するイベントを2回行った。また「図書館総合展」にテーマ展示として参加した。

	開催日	名 称	参加者数
第1回 本!ほん!! ホン!!! 絵本作家と遊 ぼう その1	平成13年 7/15(日)	ジェラルド・マクダーモット氏と ともに	43名
第2回 本!ほん!! ホン!!! 絵本作家と遊 ぼう その2	9/22(土)	動物の絵を描こう! -あべ弘士さんと一緒に-	19名
第3回 図書館総合展 テーマ展示	11/15(木) ~17(土)	「国際子ども図書館から全国へ」 -2002年、全館オープン- (主催:図書館総合展運営委員会)	約2,200名 (当館ブースへ の来場者数)

○第1回本!ほん!!ホン!!! 絵本作家と遊ぼう その1

「ジェラルド・マクダーモット氏とともに」

『太陽へとぶ矢 (Arrow to the Sun)』(コルデコット賞受賞作品)の作家であるジェラルド・マクダーモット (Gerald McDermott) 氏。絵本作家であり映像作家でもある氏自身が作成したビデオ作品『太陽へとぶ矢』をともに鑑賞しながら、楽しいお話しを伺った。また、ご自身の絵の描き方や、子どもたちにどうすれば絵を描けるのかといったお話しを、その場でマクダーモット氏が絵を描きながら話された。



○第2回本！ほん!!ホン!!! 絵本作家と遊ぼう その2

「動物の絵を描こう！ーあべ弘士さんと一緒にー」

動物園の飼育係としての経験を持つ絵本作家ーあべ弘士氏を迎え、恩賜上野動物園の協力のもとで開催した。あべ氏自身による動物園ガイドでは、それぞれの動物のおりの前で、パンダのえさの持ち方・食べ方、フクロウの習性など、元飼育係としての経験を踏まえたお話を聞くことができた。また、参加者が描いた動物のスケッチに、あべ氏本人が参加者の目の前で講評しながら加筆するという時間を過ごした。



○第3回図書館総合展テーマ展示

「国際子ども図書館から全国へ」ー2002年、全館オープンー

図書館界と図書館関連企業による最新情報の交換の場として行われている図書館総合展が11月15日から17日の期間、有楽町の東京国際フォーラム展示ホールを会場に開催された。昨年に引き続き、国際子ども図書館はテーマ展示として以下の内容で参加した。

<国際子ども図書館>

- (1) 全面開館にむけて
絵本ギャラリー体験コーナー
新しい部屋の機能紹介
展示・イベント紹介
- (2) 新しい役割
学校図書館及び関係団体との連携
蔵書と書誌情報
マルチメディア資料の提供
- (3) 建物
歴史的建造物としての国際子ども図書館
建築素材の紹介



上野図書館の戦前と戦後 (宮本百合子「図書館」より)

小説家宮本百合子(1899-1951)は上野の図書館に戦前戦後と通っている。彼女はその様子を「図書館」というタイトルで1947年3月号の『文藝』に掲載している。昭和22年の戦後間もない頃のことであり、同年12月には帝国図書館から国立図書館と改称した。さらに2年後の昭和24年4月には国立国会図書館の支部図書館となり、国立図書館としては閉庁した。

そんな戦前の帝国図書館と戦後間もない国立図書館の様子を宮本百合子は描いている。それによると、当時の図書館は有料であった。入場券売場があり、十銭の閲覧料を取ったとある。また下足場があり、下足番のお爺さんがいたらしい。年齢制限も現在の18歳(平成14年1月、20歳から18歳へ引き下げられた)とは違い16歳であった。

戦前戦後で大きく変わったのは、婦人閲覧室だった。戦前、男女を分けていた証拠として写真も残っている。かつて分け隔てられていた婦人閲覧室は、戦後一般閲覧室と名称を変え、男女共通の閲覧室となった。婦人閲覧室の様子を彼女は次のように書いている。「女ばかりの空気があって、女学校の寄宿舎の勉強部屋のようであった。同時に、友達同士で来ている人たちの私語がかなりやかましいようなときもあった。」一方、「男の人々と交わって一般閲覧室にいる女のひとたちで、気になるような話をしているものはない。」と比べている。いつの時代も女性のおしゃべり好きは変わらないようだ。



(市原美奈子)

数字で見る！

国際子ども図書館

(1) 国際子ども図書館所蔵統計（平成13年12月31日現在）

資料室	図書	日本語	児童書		21,141 冊
			児童書関連参考書		4,687 冊
		外国語	児童書	欧米言語	19,842 冊
				アジア言語	6,528 冊
			児童書関連参考書		1,200 冊
	小計				53,398 冊
	逐次刊行物	雑誌	日本語	660	タイトル
			外国語	60	タイトル
		新聞	日本語	13	タイトル
			外国語	4	タイトル
小計				737 タイトル	
特別コレクション	イングラム・コレクション			1,157 冊	
	オピーコレクション(マイクロフィッシュ)			23,915 枚	
子どもの部屋	絵本	日本語	1,354	冊	
		外国語	281	冊	
	文学	608	冊		
	知識の本	1,338	冊		
	合計	3,581	冊		

(2) 国際子ども図書館利用統計（平成13年1月5日～12月27日）

i) 来館者統計

月	合計		曜日別内訳								
			火～金			土曜			日曜		
	日数	人数	日数	人数	平均	日数	人数	平均	日数	人数	平均
1	23	3565	15	2000	133.3	4	844	211.0	4	721	180.3
2	23	4142	16	2321	145.1	4	812	203.0	3	1009	336.3
3	26	4782	17	3087	181.6	5	949	189.8	4	746	186.5
4	24	5697	16	2937	183.6	4	1014	253.5	4	1746	436.5
5	25	5844	17	2972	174.8	4	1792	448.0	4	1080	270.0
6	26	4976	17	2991	175.9	5	926	185.2	4	1059	264.8
7	25	4692	16	2868	179.3	4	777	194.3	5	1047	209.4
8	27	6534	19	4555	239.7	4	900	225.0	4	1079	269.8
9	24	4414	16	2601	162.6	4	907	226.8	4	906	226.5
10	26	5310	18	3369	187.2	4	1031	257.8	4	910	227.5
11	24	5257	17	3335	196.2	3	839	279.7	4	1083	270.8
12	22	3484	15	2323	154.9	4	683	170.8	3	478	159.3
合計	295	58697	199	35359	177.7	49	11474	234.2	47	11864	252.4

ii) 「資料室」利用統計

月	合計		曜日別内訳					
			火～金			土 曜		
	日数	人数	日数	人数	平均	日数	人数	平均
1	19	521	15	383	25.2	4	138	34.5
2	20	592	16	437	27.3	4	155	38.8
3	22	664	17	503	29.6	5	161	32.2
4	20	502	16	396	24.8	4	106	26.5
5	21	673	17	446	26.2	4	227	56.8
6	22	683	17	503	29.6	5	180	36.0
7	20	549	16	412	25.8	4	137	34.3
8	23	754	19	596	31.4	4	158	39.5
9	20	555	16	438	27.4	4	117	29.3
10	22	654	18	496	27.6	4	158	39.5
11	20	559	17	444	26.1	3	115	38.3
12	19	409	15	292	19.5	4	117	29.3
合計	248	7115	199	5346	26.9	49	1769	36.1

iii) ミュージアムの統計は「活動報告」を参照のこと。

iv) 「子どもの部屋」利用統計

月	合計		曜日別内訳								
			火～金			土 曜			日 曜		
	日数	人数	日数	人数	平均	日数	人数	平均	日数	人数	平均
1	23	1542	15	701	46.7	4	483	120.8	4	358	89.5
2	23	1629	16	662	41.4	4	319	79.8	3	648	216.0
3	26	2148	17	1163	68.4	5	487	97.4	4	498	124.5
4	24	2168	16	907	56.7	4	520	130.0	4	741	185.3
5	25	2445	17	867	51.0	4	1076	269.0	4	502	125.5
6	26	1883	17	893	52.5	5	410	82.0	4	580	145.0
7	25	1788	16	903	56.4	4	364	91.0	5	521	104.2
8	27	3264	19	2130	112.1	4	451	112.8	4	683	170.8
9	24	1724	16	769	48.1	4	441	110.3	4	514	128.5
10	26	1665	18	894	49.7	4	380	95.0	4	391	97.8
11	24	1768	17	882	51.9	3	314	104.7	4	572	143.0
12	22	982	15	494	32.9	4	231	57.8	3	257	85.7
合計	295	23006	199	11265	56.6	49	5476	111.8	47	6265	133.3

v) 複写サービス利用統計

月	件数	枚数
	(件)	(枚)
1	20	367
2	26	236
3	26	402
4	39	699
5	47	530
6	42	322
7	36	434
8	53	659
9	37	717
10	47	567
11	42	519
12	42	684
通算	457	6136

vi) 資料出納統計

月	合計 (冊)	内訳	
		閉架資料 (冊)	予約出納 (冊)
1	9	9	0
2	42	25	17
3	14	8	6
4	13	12	1
5	39	21	18
6	17	16	1
7	55	53	2
8	30	21	9
9	28	24	4
10	26	23	3
11	75	75	0
12	87	76	11
合計	435	363	72

vii) 資料館外貸出統計

月	合計 (冊)	内訳 図書館			
		国会 議員 (冊)	図書館		
			行政 司法 支部 (冊)	公共 (冊)	大学 (冊)
1	2	0	0	2	0
2	5	0	0	5	0
3	5	0	0	5	0
4	2	0	0	2	0
5	2	0	0	1	1
6	0	0	0	0	0
7	1	0	0	1	0
8	2	0	0	2	0
9	3	2	0	1	0
10	2	1	0	1	0
11	7	1	0	5	1
12	1	1	0	0	0
合計	20	5	0	13	2

viii) 国際子ども図書館見学実績

月	件数	見学者 人数	総入館 者数	比率
	(件)	(人)	(人)	(%)
1	17	375	3565	10.5
2	19	112	4142	2.7
3	20	121	4782	2.9
4	7	59	5697	1.0
5	20	146	5844	2.5
6	20	124	4976	2.5
7	19	153	4692	3.3
8	13	171	6534	2.8
9	15	177	4414	4.0
10	17	234	5310	4.4
11	18	192	5257	3.7
12	11	120	3484	3.4
合計	196	1984	58697	3.4

ix) レファレンス統計

		月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	小計
作成	目録	文書	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	文書	0	5	1	1	0	0	8	0	0	3	0	0	18	
文献紹介	電話	2	2	2	3	11	19	3	21	6	6	12	5	92	
	口頭	9	11	13	10	24	26	44	29	12	10	24	19	231	
	文書	0	2	2	2	2	2	3	3	0	0	1	0	17	
事実調査 簡易な	電話	2	2	1	2	6	27	5	6	6	5	8	8	78	
	口頭	6	5	6	17	22	29	15	19	15	12	10	11	167	
	文書	1	0	0	1	1	0	4	2	2	1	0	0	12	
事項調査 書誌的	電話	1	5	1	1	1	7	4	8	4	3	3	4	42	
	口頭	1	4	7	7	9	12	8	15	9	2	6	4	84	
	文書	13	0	0	2	2	0	2	2	2	3	2	0	28	
所蔵調査	電話	20	11	6	18	15	18	12	49	19	37	27	12	244	
	口頭	8	24	29	31	53	42	36	41	32	33	53	61	443	
	文書	5	0	0	1	2	0	7	2	1	2	0	0	20	
所蔵機関 調査	電話	5	2	4	2	4	4	5	6	1	6	8	0	47	
	口頭	2	5	9	2	11	20	11	11	5	16	9	25	126	
	文書	2	0	0	0	1	0	0	0	1	1	0	0	5	
利用案内	電話	4	0	2	3	5	6	6	20	14	7	14	3	84	
	口頭	検索 援助	13	27	19	27	51	49	59	33	28	26	32	20	384
		その他	24	22	43	31	62	54	36	58	40	29	43	29	471
	文書	0	0	0	0	1	0	0	0	2	1	0	0	4	
その他	電話	2	2	5	1	4	7	6	9	9	5	7	3	60	
	口頭	14	36	25	15	33	67	11	27	20	20	51	15	334	
	文書	21	7	3	7	9	2	24	9	8	11	3	0	104	
小計	電話	36	24	21	30	46	88	41	119	59	69	79	35	647	
	口頭	77	134	151	140	265	299	220	233	161	148	228	184	2240	
	総計	134	165	175	177	320	389	285	361	228	228	310	219	2991	

(3) その他

ホームページ訪問者統計（平成12年3月28日～平成13年12月）

	訪問者数	1日平均	平均滞在時間 (分)	再訪者 数
2000年5月	27,728	355	6:42	1,873
6月	11,490	383	6:43	2,517
7月	11,653	416	5:11	950
8月	15,864	453	5:14	1,197
9月	12,517	447	4:45	1,059
10月	12,538	447	5:35	1,083
11月	13,233	413	4:58	1,212
12月	12,859	357	6:25	1,080
2001年1月	12,111	390	4:44	1,077
2月	12,296	439	5:01	1,091
3月	10,426	336	4:24	892
4月	9,450	315	6:11	884
5月	12,614	420	17:19	1,152
6月	12,254	408	5:05	1,150
7月	11,215	361	4:56	1,040
8月	11,454	369	4:37	924
9月	9,301	310	4:26	852
10月	12,232	394	4:46	1,094
11月	11,104	370	4:27	1,003
12月	9,464	305	4:34	920
総計	251,803			

*2000.5は3.28-4も含む。

国（地域）別HPアクセスベスト10

順位	国（地域）名	件数
1位	日本	175,761
2位	アメリカ合衆国	22,703
3位	英国	779
4位	台湾	649
5位	フランス	135
6位	カナダ	123
7位	香港	110
8位	韓国	68
9位	オランダ	65
10位	シンガポール	59

世界各国からの当ホームページへのアクセスは左表のとおりである。外国語のページがまだ開設されていないにもかかわらず、52にもおよぶ国と地域からアクセスがあった。めずらしい訪問者にはトンガや、ガーナ、ニュージーランド領ニウエ島、ツバル、コスタリカなどがあげられる。

<訂正とお詫び>『国際子ども図書館の窓 第1号』p56の(2)国際子ども図書館利用統計i) 来館者統計のデータに誤りがありました。以下のとおり訂正してお詫びいたします。

10月の合計日数 24 (誤) →26 (正)、計の合計日数 194 (誤) →196 (正)

これから

国際子ども図書館の今後の予定をご紹介します。

<2002年>

- 5月5日 国際子ども図書館全面開館
開館記念展示会「不思議の国の仲間たちー昔話から物語へ」
(～9月14日)
- 5月6日 特別開館 (今年のみ開館)
- 5月～6月 「開館記念行事」おはなし会等開催
- 7月8日 開館記念シンポジウム「昔話から物語へ」
パネリスト(敬称略)：シビル・A・ヤークシュ(米国議会図書館児童書センター長)／崔仁鶴(チェインハク)(韓国仁荷大学校教授)／神宮輝夫(青山学院大学名誉教授)／野村純一(國學院大學教授)／たつみや章(児童文学作家)
- 9月28日 「子どもたちのまなざしーアボリジニからー」(仮称)
アボリジニの伝統や文化と子ども達のつながりをテーマとした展示会を予定(～12月1日)
- 12月14日 「ヨーロッパ：絵本に見る夢」展(仮称)
フランスのシャルル・ペロ国際研究所の展覧会“Europe, a dream in pictures?”の開催(～2003年1月19日)

<2003年>

- 2月1日 「プランゲ文庫児童書展」(仮称)
メリーランド大学所蔵のプランゲ文庫の児童書展を関係機関と協力して開催(～4月13日)
- 3月 「国際子ども図書館の窓 第3号」刊行

また、全面開館後、開館記念おはなし会を数回にわたって催すほか、年間を通してさまざまな行事を企画します。詳しくは当館ホームページ(<http://www.kodomo.go.jp/>)をご覧ください。

国際子ども図書館 TEL 03 (3827) 2053

利用案内

☆来館利用案内

- 利用できる人 どなたでも利用できます（ただし第一資料室・第二資料室の利用は18歳以上の方に限られます）。
- 所蔵資料 国内で出版された児童図書、児童雑誌。外国語の児童書。児童書関連図書・雑誌等。
- 資料の利用 館内利用のみ。館外への帯出はできません。
- 資料請求 9：30～16：30（於 第一資料室・第二資料室）
- 開館時間 9：30～17：00（ただし11月から2月の間、1階子どものへや・世界を知るへや、3階本のミュージアム・メディアふれあいコーナーは16：00閉室）
- 休館日 月曜日、国民の祝日・休日（こどもの日を除く）。年末年始（12月28日～1月4日）、資料整理休館日（奇数月の第3水曜日）。
- 休室日 休館日のほか、以下の日が休室日となります。
2階第一資料室・第二資料室：日曜日
3階本のミュージアム：展示会準備等のための休室日

☆図書館協力による全国サービス

国際子ども図書館は、全国の図書館を支援するサービスを行っています。満18歳以上の方なら全国の最寄りの図書館を通して当館のサービスを利用できます。

◎サービスの概要

- ◆レファレンスサービス 文書（郵送・ファクシミリ）・電話によるレファレンスを受付けています。『レファレンスサービス』の項も併せてご覧ください。
- ◆複写サービス 文書（郵送・ファクシミリ）による申込みを受付けます。
- ◆図書館間貸出 図書館間貸出制度加入館のみ利用できます。
貸出可能資料は当館所蔵の児童図書のみで、貸出のできない資料もあります。国立国会図書館所蔵資料については国立国会図書館にお問い合わせください。なお、利用はその図書館の閲覧室内に限ります。

☆レファレンスサービス

- ①主題分野 国際子ども図書館所蔵の児童書に関すること、児童文学、児童図書館活動に関すること。
- ②範囲 i) 所蔵調査 ii) 所蔵機関調査 iii) 書誌的事項調査 iv) 文献紹介 v) 類縁機関案内

③申込み方法 レファレンスは以下の方式により受け付けます。

- ◆直接来館 第一・第二資料室にて受け付けています。
- ◆文書レファレンス 最寄りの図書館を経由した、郵送・ファクシミリによるレファレンスを受け付けています。
- ◆電話レファレンス 電話では所蔵調査、利用案内、書誌の事項調査（目録記載程度）などについて件数を限って受け付けています。資料を直接確認しなければならない場合などの時間を要する調査、および聞き間違いが生じやすい外国語文献についてのレファレンスは文書でお願いします。なお、資料室の休業日、閉館後は受け付けていません。

☆複写

著作権法の範囲内で、国際子ども図書館所蔵資料について、複写することができます（有料）。即日製品をお渡しする即日複写と、閲覧した資料の複写を申込み、後日製品を受け取る後日引渡しの複写の二種類があります。

複写受付日時 開館日の10:00～16:00

製品引渡し時間 10:00～12:00 13:00～16:00

複写の種類 即日複写 電子式複写（普通のコピー。白黒・カラーがあります）

後日複写 マイクロ複写（マイクロフィルム・マイクロフィッシュ等、複写過程に撮影作業のある複写）

※できあがった製品を郵送もいたします。料金は後払い（振込）です。

図書館を経由した郵送・ファクシミリによる複写申込みも受け付けています。詳細はお問い合わせください。

☆見学のお申込み（要予約）

見学については事前に予約が必要です。詳しくは国際子ども図書館にお問い合わせください。職員が案内する1時間程度のものです。

☆学校図書館へのセット貸出

平成14年度後半から開始する予定です。詳細については別途（国際子ども図書館ホームページ <http://www.kodomo.go.jp/> 等）お知らせします。

国際子ども図書館の窓

第2号 2002.3

発行所 国立国会図書館 国際子ども図書館 平成14年3月1日発行
編集責任者 富田 美樹子
〒110-0007 東京都台東区上野公園12-49
電 話 03 (3827) 2053 (代表) F A X 03 (3827) 2043
E-mail info@kodomo.go.jp ホームページ <http://www.kodomo.go.jp/>
印刷所 株式会社 山越

本誌に掲載した論文等のうち意見にわたる部分はそれぞれ筆者の個人的見解です。

本誌に掲載された記事を全文または長文にわたり抜粋して転載される場合には、事前に国際子ども図書館企画協力課協力係に連絡してください。



The Window

the journal of the International Library of Children's Literature

No. 002 March 2002

Contents

Frontispiece : International Library of Children's Literature under reconstruction	
Foreword Mikiko Tomita	2
ILCL logo decided !	3
<Toward the full opening of the International Library of Children's Literature>	4
① Facility guide	
② Services after May	
I Resource and information center	
II Domestic networking and cooperation	
III International networking and cooperation	
IV Services for children in the library	
<i>Toward the exhibition of children's books in the Prange Collection</i>	9
Children's books from abroad in the collection of ILCL	
"Nye eventyr og historier" by H. C. Andersen and others—from the Nobumasa Ikeda (Yoichiro Minami) Collection —	Kikuko Sugiyama 10
Showing visitors around ILCL	14
<i>On the building of ILCL</i>	18
Development of The Museum of ILCL	Hiromi Hattori 19
Welcome to the Picture Book Gallery	25
Results of survey on the Picture Book Gallery—Picture Book as Stage—	
<i>Story behind the statue of a man throwing a spear</i>	30
Report of the Asian Congress of Children's Librarians 2001	Naoko Sato 31
ILCL activity report	33
<i>Ueno Library before and after World War II</i>	40
ILCL in figures	41
Schedule	46
User's guide	47